



どべっこ祭りが行われた遠野ふるさと村で、訪れた観光客に昔話を披露する語り部の菊池タキさん(右から3人目)。囲炉裏を囲み、オシラサマ、カッパやせやみの話など昔話の数々に、会場は和やかな雰囲気になっていました。(1月24日、遠野ふるさと村こびるの家)

●取材を終えて
あなたが持っている物語を語り継ごう

『遠野物語』全119話に収められている、佐々木喜善が柳田國男に語った不思議な話には、遠野の厳しい自然や環境の中で、自然や動物たちと共生してきた遠野の人々の暮らしが記されています。カッパ淵、五百羅漢や続石など、物語に登場する自然環境や遺産、オシラサマに登場するような人と馬との密接な暮らしぶりなど、発刊から100年経った今もわたしたちの生活の中に大切に受け継がれています。

どんなに時代が経っても、歴史や文化を受け継ぐ土壌と、多くの自然や遺産を大切に守る風土が残っているところが遠野の魅力であり、誇りです。そして、ここに住んでいるあなたは、遠野の魅力を語る立派な『語り部』です。

『遠野物語』発刊から100年目の今年、120話目から続く新たな物語を作りだすのは、わたしたち自身です。さあ、あなたの物語を語り継ぎましょう。

特集 新たな『物語』の継承へ 完

子どもたちに伝えることで郷土愛につながればいい

これも何かの運命なのか。今から30年ほど前に、自宅の畑から一個の土偶を見つけた菊池金孝さん。多くが縄文時代に作られたといわれる土偶。「どんな人が、どうしてこの地に持ってきたのだろうか。多くの疑問が、金孝さんを歴史の興味へと駆り立てた。言い伝えだけではいずれ滅びてしまふからと、町内の有志で構成する「小友探訪会」の一員として、地域の歴史を書き残している。

どこかで必ずつながる。そこにたどり着くのが大変なんだけど、魅力でもあるんだな」とほほ笑む。

金孝さんら「探訪会」の皆さんは毎年、小友小学校の総合学習の講師として、地域の歴史や史跡を子どもたちに伝えている。「話で聞くだけでなく、自分の目で確認することが大切」と話す金孝さんは、必ず子どもたちを現地に案内している。

「大人になった時に思い出して、また行ってみようと思ってくれればいい。それが、ふるさとを愛することにつながるはず」と期待する。子どもたちの郷土愛をほぐくむ、金孝さんの歴史探訪は続く。



歴史の語り部

菊池金孝さん

きくち・きんこう (76)=小友町=



都会にはない、遠野らしい暮らしぶりを伝えていきたい

15歳で弟子入りしてから70歳まで、建築大工として活躍した小松喜一さん。手と足の指を巧みに使い、30分ほどで一足のわらじを編み上げる。長年培った手先の器用さを生かし、わら細工を伝承する語り部の一人だ。

子どものころ、休みの日は父の炭焼きの手伝いをしてきた小松さん。父が作るわら細工を見よう見まねで覚え、自分が履くわらじやつまごを作っていた。

「今は何でも買って捨てる時代だけど、昔は必要な物はみんな自分で作ったもんだ」と昔を懐かしむ。

大工仕事をしていた時期は忙しく、わら細工を作る機会



もなかったが、幼いころの思い出は体が覚えているもの。仕事有一段落した20年ほど前には、実家がある小友町のし踊りにわらじを提供していたこともある。

現在はシルバー人材センターの仕事や配食ボランティアなどに励み、空いた時間を見つけては駅前通りの語り部スポット「かたるべ工房」で、わら細工を上演をしたり、訪れた人に体験させたりしている。

「遠野の子どもたちはもちろんのこと、都会から来る観光客にも見せたいよね。」

都会では消え去ってしまった遠野の懐かしい暮らしぶりを伝え続ける。

生業の語り部

小松喜一さん

こまつ・きいち (75)=遠野町=

